

47. 八日市市瓦屋寺町所在 瓦屋寺瓦陶兼業窯址群 について

八日市市建部瓦屋寺町窯跡発見の経過

八日市市瓦屋寺町一帯の農地は湿地帯で愛知川の伏流水が瓦屋寺山の山根にあたって所々から湧出し浜野沢、瓦屋寺沢などを形成していた。昭和53年9月1日から八日市市西部は場整備事業が建部瓦屋寺町並びに建部日吉町の西部一帯を対象に開始され、先ず瓦屋寺町から着工された。私は従前より瓦屋寺の古代瓦の伝来もありそれに深い関心を有していたが、期待をもってこの工事を見守っていた。瓦屋寺地先には「窯」に関連のある、小字や言い伝えられた「地名」がありその場所を特に深く観察していた。たまたま小字「カマエ」（窯前と推定）の工事現場から、瓦を発見した。同年9月26日午前6時のことである。その大きさは、長さ5cm、巾6cm、厚さ2cmの破片であり、布目平瓦で、叩き目が施されていた。また周辺から続々と瓦の破片や、土器(須恵器)の破片も発見された。また10月23日蓮華紋軒丸瓦の破片2個が発見された。新設用水路やパイプの埋設のための掘削工事のその断層に、瓦や須恵器が点在する地点も発見された。その場所は「カマエ」市道より、9m東方の地点であった。その断面は、耕作土25cm、黒鼠色粘土35cm、黄色粘土砂まじりの層になって、黄色粘土砂まじりの層に、瓦、土器破片が埋っていた。また、そこより北へ20m、市道よ



り東へ30mの地点から、昭和54年2月3日炭の粉、灰などを多数発見した。それにより山麓通称「ユヤノタニ」（油焼の谷）から、流れてきたものと推定し、更に調査を重ねていったが2月11日午後「ユヤノタニ」の南側の山麓で「瓦」の破片2個を発見した。この付近を地形からも窯跡と推測して搜索したところ、灰や炭の粉を多量に発見することができ遂に同所で、2箇所の窯跡を探ることができた。1号と2号の窯跡の距離は6mであり、更にその間の上方にも1基の窯跡と思われるものもあり、その窯口とも思われる所に石が横たわっているようにも推定されるが、今後の調査で確認できるかもしれない。この窯跡発見には、建史会



八日市市建部瓦屋寺町

員田中氏が同行した。

遺跡の位置

古くは「白鹿山」と呼ばれていたこの山は、通称「瓦屋寺山」と謂われ箕作山系の一山である。その1つの峰に「小字時雨谷」があり、その山麓に「ユヤノタニ」（油焼の谷）と称える谷がある。そこで発見された窯跡は、南側の斜面に2基並んでいる（位置図参照）。

その場所は北風を防ぐよう南側にあり斜面の角度は35度から45度位で、すぐ下方に、平地があり瓦のつくり場や、乾燥場によく、その南側には谷川が絶えず流れて、窯の場所としては、条件を備えている。また、窯跡より山上に向け北西約100mのところ瓦の土を取採したと思われる地帯があり、そこから土を取り「シュラ」を使って下がれば、恰好の「窯場」とも思考される。

遺跡

この「窯跡」は、八日市市浜野町の延命寺山麓を経て五個荘伊野部に通じる市道「旧いせみち」の「小字カマエ」にある瓦屋禅寺参道入口の右側で、市道より参道を48m登り右へ32mのところ、1号窯があり、2号窯は6mの間かくを置いて、何れも「登り窯」の

形態を有している。1号窯は、全長約8.5m、巾1.6m。2号窯は、全長約7.8m、巾0.7m、斜面角度は約40度。1号窯の灰原は、約3m四方に確認できる。2号窯は約5m四方の灰原がみられる。（大谷 巖）

瓦（第1・2図）

軒丸瓦（第1図9）第1号窯採集。灰白色のやや須恵質に近い焼成で、胎土は精選されたようであるが、砂粒をわずかに含む。小片で8弁のうち1弁と半ば程残存する。

八葉蓮弁と思われる残存複弁はその花卉先端が二葉観察されるが、いずれもやや細部で異なる。右の弁端はやや直線形となり左のそれは子葉に対応して二つに分かれハート形を呈する。

また、花卉の形も基部から大きくふくれたハート形を呈さず面長の感じが強い。子葉も先端が幅を増しつつ丸く取まるものではなく、比較的ゆるやかにやや先端にいく程幅を増し細長く延びる形状を呈し、その先端も丸くまとめず先細りのように延びている。

なお間弁は1個所観察出来るがT字形を呈している。しかし実際はY字形に成形していたものが焼成前におしひしがれたようである。

そりはわずかに認められ、彫りは少し深い。花卉輪

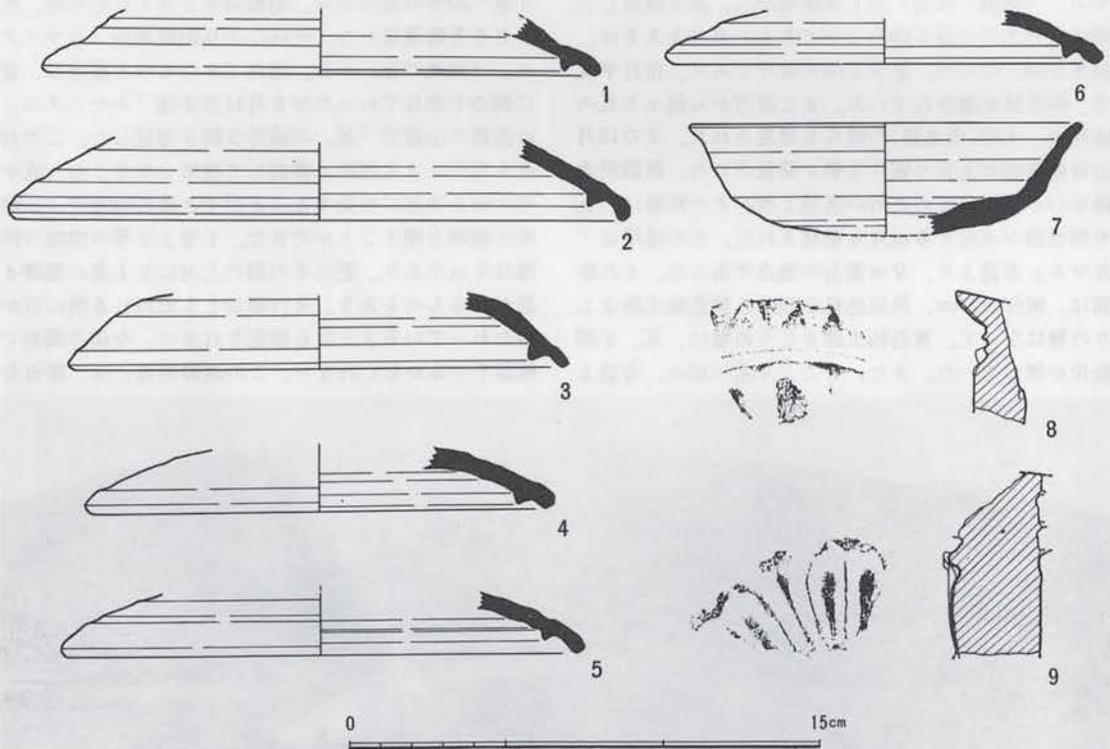


図1 出土須恵器と軒丸瓦実測図・拓影

郭線は先端に行くときにわかに高くなり、間弁も同様である。瓦当の厚みは花卉部で2.6cm、径は推定16cmである。裏面に布目はないが丸瓦の剝離痕は明瞭である。

須恵器（第1図）

1号窯 坏身1 坏蓋3 壺の高台1 甕腹1の各破片が1979年2月11日採集された。

坏身 ゆるやかにS字に外反する外形をもった坏である。内外面ともヨコナデ整形仕上げで、外面青灰色、内面青味帯灰白色で胎土・焼成良である。

坏蓋（第1図1・4・5） 3点とも口縁部内側にみられるかえりの形状が異なり、形態的には時間差が看取されるが、同一焼成か否か不明である。また蓋部口縁からの形状も2つに区別され、1つはゆるやかに弧をなす蓋部をみせ（口径17.5cm、16.4cm、現器高1.8cm、2.0cm）、他の1つは口縁先端よりで屈曲し外方へ開いている。いずれも内外面ともヨコナデ整形仕上げであり（口径16.4cm 現器高2.2cm）、1は青灰色及び淡青灰色、5は暗赤橙色及び暗橙色、4は灰白色を呈している。胎土は1が最もよく水ごしされており、2、3は水ごししてはいるが砂粒を含んでいる。

2号窯 坏身1 坏蓋3 高台1が、1979年2月16日に採集されている

坏身（第1図7） 底部がさほど平坦ではなく体部への移行がゆるやかに曲線を描く特徴的なもので、口縁端部もわずかに外反する。口径6.3cm、現器高3.6cm。内外面ともヨコナデ整形の仕上げであるが底部中心のみ未調整である。外面は青味帯灰白色で内面も緑味帯灰白色を呈し、胎土は水ごししているが砂粒を含んでいる。焼成良。

坏蓋（第1図2・3・6） 3点とも内側についたかえりの形状が細部で異なり型式学的には時間的な前

後とみなしたいが同時焼成の可能性もあり断定出来がたい。

また、天蓋部についてもゆるく弧をなすものとやや外方へ延びて屈曲するものがあるが注意を引いた。

3は、かえりが太く大きく天蓋部はやや外方へ広がるが器高は高く現高2.4cm、口径15.6cmである。身との正位置の重みによる色調の相違があつて、外面淡青灰白色、内面青緑色帯灰色である。胎土は水ごしされてきわめて良く微砂粒を含み内外面ともヨコナデによる整形である。6も天蓋部が口縁部よりでわずかに屈曲して外方へ広がるもので重ね痕が明確である。外面は青味帯黄灰色、内面は青灰白色であり、胎土は水ごしされ微砂粒を含む。内外面ともヨコナデ整形であるが、天蓋上部は未整形に近いヨコナデのようである（口径13.4cm、現器高1.7cm）。

2は、天蓋部に曲率の変化はみとめられずゆるやかな弧を描く、かえりは断面三角形を呈し、シャープである。すべてヨコナデ整形による仕上げで口縁端部も丸く収めている。外面青灰白色、内面淡青灰白色で胎土は水ごしされて良、砂粒をわずかに含む（口径17.4cm、現器高2.6cm）。

高台 坏部の高台か、八の字形に坏部に取りついている。生焼けであるため色調は橙白色及び青灰色を呈し、胎土はきわめて良い。すべてヨコナデ整形仕上げによる。

むすび

寒川辰清編輯になる『近江輿地志略』（註1）（享保19年、1734）神崎郡瓦屋寺村〔瓦屋寺〕の1項があり、そこには次のように記されている。

「瓦屋寺村の山上にあり、聖徳太子建立の旧跡也。太子初撰津国天王寺を建立し給う時、此山の土を取り

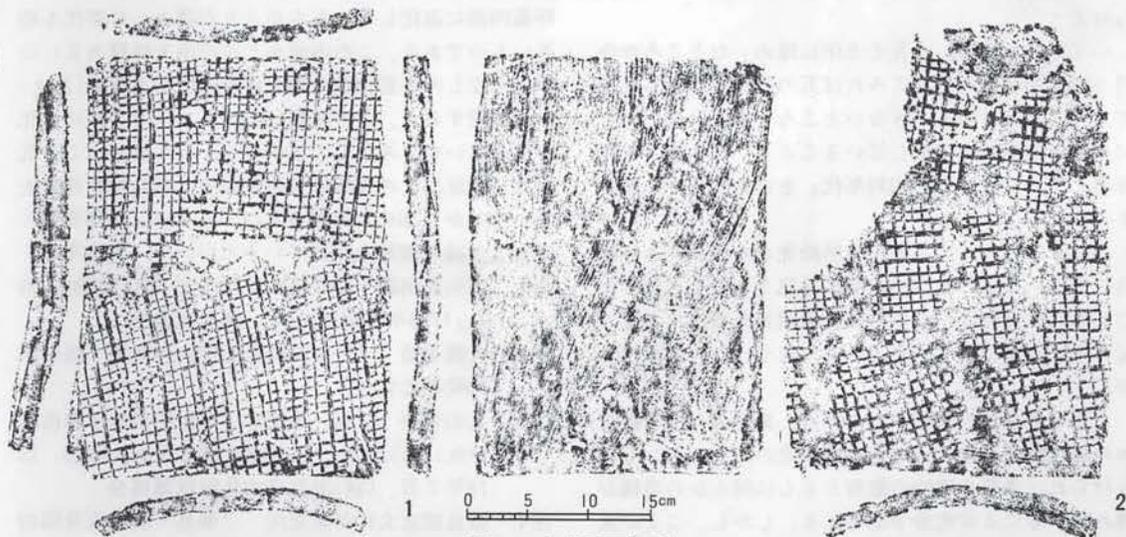


図2 出土平瓦拓影

て瓦を作り給う。其土を取りし地を浜野沢という。其地に一寺を建立し瓦屋寺と号し給うは此故なりという。尤其時の瓦を土中に埋み給うという。本尊観世音庖瘡を守り給うとて、土俗芋を糸に貫いて仏前に献ず。当時禅寺妙心寺の末寺也」

ところが、この短文の中に1つの矛盾がみうけられるために問題解決の緒口となりそうである。というのは、天王寺の建立にともない瓦を作ったとあるにもかかわらず、尤其時の瓦を土中に埋み給うとあって、これではその瓦を天王寺に送ったことにならないのである。

この矛盾の解決のためには次のような推理はどうであろうか。

瓦屋寺の山に平安時代の初頭に朔る山岳寺院があった。しかし、この寺院の名称は今では伝えられていない。ところが、この寺院とは無関係に中世ごろのある時期に山麓部から多量の大きな瓦が発見された。そこでこの瓦の由来を考えて、そのころこの寺院でもさかんであった聖徳太子信仰にあやかり、この瓦は天王寺へ運ぶためのものであったと考えた。ここからこの山岳寺院を瓦屋寺と呼び、山麓部一帯の村も含めて瓦屋寺村と今日まで呼ばれることになった。ざっとこのような推量である。

いずれにせよ、山麓部で多量の瓦の出土することが知られておらなければ、このような伝承も生まれてこなかったであろう。

また、他の推測は、この山麓部に俗称として「瓦屋」の地名が永く残っており、瓦の多量な出土もあったため、当地の山岳寺院も地名をとって瓦屋寺と称し、さらに聖徳太子信仰の広がりとともにこの「瓦屋」や瓦が天王寺と結びつけられることになったものとも考えられよう。

いずれにしても、「瓦を土中に埋め」たところが今日の学問的成果をもってみれば瓦の窯跡すなわち瓦屋であったことは興味つきないところである。瓦とともに少量の須恵器を焼成していることも、この瓦の年代を考えていく上での「相対年代」を求める良好な遺跡ということになる。

なお、この瓦屋にともなう供給先ともいべき寺院跡（あるいは瓦の出土地）が未発見であることは、わたしたちに当地域の本格的な分布調査を要求するものである。一体この瓦はどこへ運ばれていたのであろうか。

ただ1つ注意を喚起することは、瓦屋寺の前方数百mの近江鉄道沿線ぞいに正東西南北の地割が著しくみうけられ、多量の遺物の散布とともに何らかの遺構が埋れていることが充分予想される。しかし、ここに瓦の散布が伴うかどうか今後の調査をまたねばならない。

また、瓦屋禅寺の保管する山麓部出土（註2。神崎郡志稿によると瓦屋寺三門遺址発掘とある）と伝える軒丸瓦は、高温を二次的に受けたひずみの大きな瓦であって、瓦の生産地で不良品として破棄されたものであろう。しかし、この種文様の軒丸瓦は、今回の瓦窯址中からは認められず、この瓦屋禅寺保管の軒丸瓦がいずれここで焼かれたものかより一層問題は深まってきた。

しかも、現在の調査状況では相当数の瓦窯址が埋もれている公算であって、してみればなおさら大規模な瓦の供給先（大寺院など）を想定せねばならないことになる。

では、この瓦窯址の年代はいつまで朔るのであろうか。

まず、瓦の文様からみてみよう。軒丸瓦に関しては、瓦当の周縁に面違い鋸歯紋をめぐらし、花卉は従来例のなかった1枚の花卉に子葉2個を配する複弁蓮華紋である。中房は大きく蓮子も大粒である。また、この軒丸瓦と対になる重弧文軒平瓦が伴出している。さらに、平瓦はそのすべてが格子の叩き文を施し、表に布目がみうけられる。

これらの瓦にみられる特徴は、その年代を白鳳時代とするに十分なものであり、複弁蓮花紋は奈良県川原寺の天智天皇建立時にわが国ではじめて使用されたといわれる初唐様式のものであって、天智朝を朔るものではない。また、平瓦の格子文様は瓦の製作時に生じた製作技法を示すものであるが、これもまた縄目の叩き文に取って替わる奈良時代以前のものであり、この瓦類を白鳳期に想定できる。

他方、伴出須恵器には坏身、坏蓋が認められ、年代を推定出来る坏蓋の良好な資料がある。この類例は栗東町下砥山蛭子講陶瓦兼業窯（註3）でも紹介したが、坏蓋内面に退化しつつあるかえりが認められ年代も相近いものである。この内面かえりの消失時期あるいはかえりなしの坏蓋出現時期を藤原宮址関連遺構（註4）から推定すると、この時期（694年）にはすでに変化が生じていたとみなしてよかろう。とすれば、この瓦屋寺瓦窯址出土の瓦類は694年以前に朔る可能性は大きい。しかし、645年を遡るものではない。今後研鑽を重ねこの種の問題を深めていきたい。（丸山竜平）

註1 寒川辰清編 小島捨市校定頭註『近江輿地志略全』1734年脱稿 1968年 歴史図書社

註2 大橋金造 『近江神崎郡志稿』1928年 滋賀県神崎郡教育会

註3 丸山竜平 「34、栗東町下戸山山田蛭子講南古窯址について」『滋賀文化財だより』No.16 1978年7月（財）滋賀県文化財保護協会

註4 奈良国立文化財研究所 『飛鳥・藤原宮発掘調査報告II』1978年